

2012. 12. 25.

日本コミュニケーション学会九州支部

KYUSHU CHAPTER of The Communication Association of Japan (CAJ)

**NEWSLETTER**

No.22

Dec.2012

事務局： 住所：850-8506 長崎市片淵 4-2-1 長崎大学経済学部 丸山真純  
Tel:095-820-6376 Fax:095-820-6376 E-mail: kyushu@caj1971.com

## CAJ 九州支部第19回研究大会を終えて

大会実行委員長：佐藤 勇治（熊本学園大学）

去る10月6日（土）熊本学園大学（以下 KGU）を会場として、第19回九州支部大会を開催しました。KGU の岡本恵也学長には会場校を代表して歓迎の挨拶をしていただきました。大会テーマは「国際化の時代を生きる - コミュニケーション学にできること - 」でしたが、基調講演として開発経済学がご専門の Maung Maung Lwin 先生（KGU 経済学部教授）に、「Globalization and Developing Countries: A Preliminary Focus on Communication Ability and Research Findings」という演題でお話をいただきました。グローバリゼーションの進展の中で、発展途上国の貧困の状況を理解するのに大変役立ちましたし、コミュニケーションがどのようにかかわっているのか、かかわるべきなのかについての認識も深めることができました。

参加者数は会員19名、当日参加者2名でした。個人研究も多岐にわたるテーマで8の方が成果を発表され、良き学びの場となりました。大学院生の方の発表が多い点でも、今後のさらなる研究成果が期待できると共に、学会の発展にも寄与していただけるものと確信しました。参加者は少ないながらも委任状提出者が15名いたため、支部総会も成立し、次年度予算案など執行部の原案が審議のうえ了承されました。大会終了後は学内のグリルで懇親会を催し、楽しい一時を過ごすことができました。

KGU での開催は3回目であり、私が実行委員長として支部大会を開催するのは、前職場の久留米工業高等専門学校時代も含めると4回になりますが、経験を積んだ割には、ご参加いただいた支部会員の皆様に、ご満足いただけるような大会となりえたかは疑わしいものが

あります。それは久留米高専時代の会員は私一人、KGUでも筒井先生を含めて二人のみと、極めて少ない労働力で大会準備と当日の運営を行わなければならない点が主因です。アルバイトの学生にも手伝ってもらいましたが、アルバイトである以上、当日と前日の若干の時間しか活用することができず、支援体制としては心もとない状況でした。ゼミの学生のボランティアサービスももちろん活用しましたが、あまりたくさんの仕事を頼むわけにもいきませんでした。

2年前の鹿児島大会のように、支部会員は宮下先生ただ1名でありながら、実によく組織化されて、多くの方たちの支援の下に実行された大会もありますので、私の不徳の致すところと言える面も大きいのですが、会員数が少ないことは今後の支部大会を開催するうえでも、難点となり続けることは間違いないと思われまます。この意味でも、支部会員を増やす努力を今後とも継続していくことが課題であると改めて認識した次第です。



岡本憲也熊本学園大学学長挨拶



宮原哲 CAJ 会長挨拶

## 特別講演の内容報告

2012年10月6日、ミャンマー出身で1993年から熊本学園大学経済学部で教鞭を執られておられる Maung Maung Lwin 先生に、「グローバル化と発展途上国」というテーマで講演をしていただきました。先生のご専門は開発経済学ですが、今回の講演はコミュニケーション研究者にとって大変有意義なお話でしたので、講演の要旨を先生にお願いしました。以下は講演内容の要旨です。

演題：「グローバル化と発展途上国

- コミュニケーション能力と研究結果への予備的考察を中心に -

*Globalization and Developing Countries: A Preliminary Focus on  
Communication Ability and Research Findings*

講演者：Dr. Maung Maung Lwin(熊本学園大学経済学部国際経済学科教授)



ご講演中のルウィン先生

### Contents:

#### Introduction

1. The Meaning of Globalization and Internalization
2. The Impact of Globalization
3. The Concept and Extent of Poverty in Developing Countries under Globalization
4. The Impact of Lehman Shock on a Village of Cambodia: A Survey Result
5. The Importance of Communication Ability in Village Survey Works

#### Conclusion

The first section of the lecture introduces the main differences between concepts of internationalization and globalization. Under the process of globalization, free movements of capital, labor, goods and services, and business information made possible for East Asian economies of South Korea, Singapore, Taiwan, Hong Kong achieved the Newly Industrializing Economies (NIEs) status during the end of 1980s. Moreover, the late comers of Thailand and Malaysia are since the middle of 1990s; China and Vietnam are since the early 2000s; and recently, India, Cambodia, and Myanmar are also achieving remarkable high and stable economic growth. But, on the other hand, Asian monetary and financial crisis of 1997 and Lehman Shock of 2008 created unmanageable economic problems such as increase in unemployment and number of poor people as well as long lasted economic stagnation in a global scale. For example, about 34 million people lost employment and about 64 million people have to make their living on less than \$ 1.25 a day. Developed countries experienced the average unemployment rate of 9% and negative 3.4% of GDP growth rate. The countries of Asia also have had the bitter experiences in their growth of GDP such as, Thailand (-2.2%), South Korea (0.2%), Cambodia (-2.0%) and Philippines (1.1%) during 2009

and 2010. These advantages and disadvantages of globalizations are discussed in section (2). The concept and extent of poverty in developing countries are examined in section (3) of the lecture. Regarding extent of poverty, the percent of population who make their living on less than \$ 1.25 a day in Cambodia is about 28.3%, India 41.4%, Laos 33.9%, Malawi 73.9%, China 15.9% and Vietnam 13.1%. Human Poverty Indexes and life satisfaction data are provided in this section. Section (4) of the lecture introduces the impact of world financial crisis on a small Cambodian traditional rattan handicraft village call Bra Youth. The population of Bra Youth is about 589 and total number is household is 116. The 88 households representing about 75.9% of village total household make their living on \$ 1 a day of income from producing of traditional rattan handicrafts. The village still does not have primary school for its children and health care facilities for its people. About 37.4 percent of rattan handicraft producers of the village are still illiterate. Regarding globalization impact, the survey result explains that the number of foreign visitors of the World Heritage Angkor Wat declined sharply during 2009 and 2010 due to the Lehman Shock (15/9/2008). The Bra Youth village under our survey is located about 8km away from the Angkor Wat. The handicraft order from the middle men of souvenir shops of Siem Reap city as well as their income declined more than half compare to normal year due to the sharp decline in number of Angkor Wat tourist. It is the real fact that the world financial crisis created severe socio-economic difficulties in the daily life of Bra Youth village.

The last part of the lecture attempts to examine the importance of communication ability in conducting village poverty research works under different cultures. According to the village survey experiences of Cambodia, language ability, knowledge on village economy, and understanding of village life style, custom, race and religion etc. are very important for achieving reliable survey and interview results. However, this paper made a concluding remark that “besides the above mentioned important factors, communication ability of researchers throughout the research work plays most important role in obtaining fruitful survey results”.

## 第 20 回記念支部大会のご案内

支部大会実行委員長 畠山 均(長崎純心大学)

CAJ 九州支部第 20 回大会を長崎純心大学で 2013 年 9 月 28 日(土)に開催します。基調講演は長崎純心大学比較文化学科片岡瑠美子教授にお願いし、快諾を得ております。具体的な講演内容は未定ですが、片岡教授の専門である江戸時代から明治にかけての長崎と欧米の文化交流をテ

ーマとした講演となると思います。ご期待ください。

思い返せば第1回九州支部大会が本学で開催されたのが1994年10月2日。その後2001年の第9回大会、2008年の第15回大会と2度ほど本学を会場として支部大会を開催し、どの大会も盛会で実り多き大会であったと記憶しております。そして来年の第20回という記念すべき大会を本学で開催できることを心より嬉しく思っております。

第1回大会を開催した20年前はCAJの支部活動自体も活発ではなく九州支部大会を開催する事はある意味で大きな冒険(暴挙?)であり、準備も手さぐり状態で進めたと思います。また、当時は支部大会が毎年、継続的に開催されるという期待もあまりありませんでした。しかし、途切れることなく今日まで毎年、支部大会が開催されてきた事の意義は大きく、ささやかではありますがCAJの発展に貢献してきたのではないのでしょうか。これも九州支部のメンバーの協力の賜物です。

来年の第20回大会はこれまでの九州支部の歩みを振り返り、支部の現状と課題を明確にし、今後のさらなる発展に向けて何をしていくべきかを共有し、それを実行していけるだけの勇気を得ることができる大会になればと思っております。多くの会員の皆様がまだ夏の名残りをあちこちで感じる事ができる秋の長崎にお越しくださることを心より祈念しております。

## 特別寄稿(1)

### 「大人」なロムニー

(敬称略、以下同様)

吉武 正樹(福岡教育大学)

これは“News”“letter”なので、日常生活でコミュニケーション学のアンテナが反応した「最近の話題」について、皆さんへ「手紙」を綴るつもりで本稿を書くことにしよう。話題は、アメリカにおける4年に一度の大イベント、大統領選挙。選挙戦と言え、その内実はスピーチやディベートといった「言葉による戦い」であり、宣伝・広報を通じた「イメージ形成戦略」である。この意味で、大統領選挙とはまさに「コミュニケーション的イベント」だといえよう。

40分近いオバマ氏の受諾宣言は見る人の心を震わせるものだったが、今回私が注目したいのは敗者ロムニー氏の敗北宣言の方だ。論敵オバマ氏との死闘の末、ロムニー氏が切り出したのは敗戦の弁ではなく、大統領、ご家族、オバマ支持者への祝福の言葉だった。胸の内の悔しさは計り知れないが、氏は平静を装い、オバマ氏の健闘をたたえる「大人」の振る舞いを見せた。

共和党支持者へ感謝の意を表した後、ロムニー氏はこう続ける。「私たちは現在危機的状况に

ある。このような時期に政治闘争などしている暇はない。我々指導者は国民のために党派を超え、取り組んでいかねばならない。これぞ「大人」だ。思わず、被災地をよそ目に、絶好のチャンスとばかりに権力闘争にふけり、高額の税金をつぎ込み総選挙に盛り上がる、どこかの国の指導者たちの顔が思い浮かぶ。

ロムニー氏の敗北宣言そしてオバマ氏の受諾宣言において両者が口にしたのは、「アメリカ国民」への忠誠心だ。過酷で壮絶な選挙戦の後も二人をかりうじて繋ぎとめたのは、「国民のために」という強い信念だった。両者はアメリカ国民の未来に関する“two different paths”（オバマ）を、言葉で国民に提示する。そこには自らは国民を導く理念の「代弁者」であるという、崇高なものに対する敬虔な構えがある。弁論者、すなわち speaker といえばステレオなどの「スピーカー」を意味するが、スピーカーも主音源を「代弁」する。優れたスピーカーとしての大統領候補者とは、私たちがイメージするような自己主張する主体ではなく、つねに理念を表象する控え目な主体にすぎないという一面を持つ。

一步議論を進めてみよう。候補者が「代弁者」ならば、その候補者は目前の人物である必然性はなく、有権者にとってはより優れた音を奏でるスピーカーであれば誰でもよいことになる。つまり、候補者は入れ替え可能であり、そこでは、理念としての「言葉」と理念を代弁する「人」は明確に切り離されている。大統領選の舌戦は言論レベルでの戦いであり、人へ矛先が向いているわけではないのだ。

一方、日本では（あ、言ってしまった・・・）、芸能界やスポーツ界の人気者や「美しすぎる」が候補者となり、政策論争よりも知名度が選挙結果を大きく左右することが多い。そう言えば、日本の二大都市東京・大阪の知事がコメディアンだった時期があったが、どうも日本では「人」と「理念」をうまく切り分けられず（「人物レベル＝言論レベル」）、人物の方に大きく引っ張られる傾向がある。

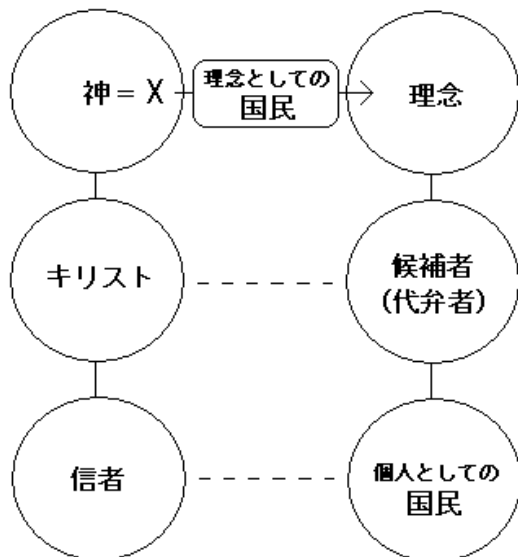
さて、「理念 - 代弁者 - 国民」という構図で思い出すことがある。「キリスト教」だ。この図式は「神（＝聖書の言葉） - キリスト（＝神の代弁者） - 信者」というキリスト教のストーリーを彷彿させる。つまり、アメリカ大統領選の論理はキリスト教の論理によって駆動されているのだ。

ただし、である。ニーチェはかつてこう宣言した、「神は死んだ」と。近代以前にあった神話的世界観は近代化が進むにつれ脱神話化され、人々は超越的で絶対的な神のリアリティを失ってしまった。すなわち、候補者が正しき理念を語っても、それらの理念の「正しさ」を保障するのはもはやアプリアリには想定できない。

では、「神」の位置が空虚になった今、政治的「理念」の根拠は何によって支えられるのか。絶対的の真実としての理念、つまり神が保障する「正しき」道は何によって担保されるのか。思うにそれこそが、ロムニー氏とオバマ氏がしのぎを削り、決着と同時に刀を鞘に収め語った、先述

の「アメリカ国民のために」という理念なのだ(ここでいう「アメリカ国民」とは抽象概念であり、一人ひとりの実存的な国民とは区別する)。

国民は「神」的な絶対的に正しき道が演繹的に与えられないことを知っている。それゆえ、代弁者としての候補者を通じて帰納的に正しき道がデザインされる。ここでは「アメリカ国民のために」という信念のみが唯一絶対的なものとして想定され、かつ、その信念をもとに紡がれた言葉がデザインされた「正しき道」に事後的にリアリティを与えるのである。



すなわち、大統領選挙とは、「神が死んだ」真空状態を「アメリカ国民」が引き受け、代弁者が言語化する道のうちどれを「正しき道」として選択するか、国民があえて「決断」する儀式なのである。その意味で、神に誓いをたてる大統領就任式も、神がいるものとして振る舞うことで大統領を「キリスト」に仕立てる儀式だといえよう。

しかし、どこかの国の政治に失望感を抱きつつも、また、マッカーサー元帥が日本を子ども呼ばわりしても、だからといって「日本もアメリカのようになれ」と要求するのは短絡的かもしれない。というのも、日本は元来キリスト教国家ではないからだ。むしろ、日本で「日本国民」と声高に叫ぶことは、「日本国民」を「神格化」してしまう恐れさえある。神化した日本国民は抽象概念に留まらず、個々の実存的な国民を超えて絶対的な中心として主体化されてしまい、いとも簡単に個を抑圧するナショナリズムへと取って代わられてしまう。

では、どうしたら日本では国家が暴走しないように、国民国家システムをうまく操縦できるのだろうか。この問いに答えるには論文一本が必要だろう。ただ一言だけ言うと、その鍵は「大人になる」という普遍性にあると私は見ている。大人になるとは「素」で生きることとは違う。「大統領」「首相」「父親」「母親」「教師」といった「役」を引き受け、敢えて演じるその振る舞いの中に「公」の意識が萌芽し、人は大人になっていく。5分たらずのスピーチだが、アメリカ人というより大人としてのロムニー氏の振る舞いと、彼が紡いだ言葉の中に、その要素が凝縮されているように、一瞬私には見えたのである。

では、どうしたら日本では国家が暴走しないように、国民国家システムをうまく操縦できるのだろうか。この問いに答えるには論文一本が必要だろう。ただ一言だけ言うと、その鍵は「大人になる」という普遍性にあると私は見ている。大人になるとは「素」で生きることとは違う。「大統領」「首相」「父親」「母親」「教師」といった「役」を引き受け、敢えて演じるその振る舞いの中に「公」の意識が萌芽し、人は大人になっていく。5分たらずのスピーチだが、アメリカ人というより大人としてのロムニー氏の振る舞いと、彼が紡いだ言葉の中に、その要素が凝縮されているように、一瞬私には見えたのである。

ということで、私の“letter”はここまで。やや硬い「手紙」になったが、後は読者の「お返事」を待つことにしよう。



## 特別寄稿(2)

### ハワイ大学からソウルへ、圧倒的な韓国パワー

宮下 和子 (鹿屋体育大学)

2012年8月8日から15日まで、ハワイ大学で、アジア太平洋交流センター(Center for Asia-Pacific Exchange: CAPE)が主催する「アメリカ研究フォーラム」)に出席しました。参加者は日本、韓国、フィリピン、米国からの10名で、米国の政治、経済、文学、芸術等についてハワイ大学教授陣による刺激的講義と議論が展開しました。



(筆者：後列右から4番目)

同時期、CAPE主催による「インターナショナル大学生プログラム」(8/3~9/1;勤務大学から4名参加)や「アジア英語教師プログラム」も並行していましたが、前回参加した2009年との大きな相異点に驚きました。韓国の8地域から、各々20名ほどの若い英語教師からなる8グループの英語研修も展開していたのです。CAPE所長のユ博士(Dr. Jai-ho Yoo)によると、1997年に小学校に英語教育を導入した韓国では、新学期開始の3月、各地域で優秀な英語教師を選抜し、5ヶ月間地元の大学で特別指導を実施後、夏季にハワイや英国、ニュージーランドなどで海外研修を行い、英語力と実践指導力の向上を図っており、その全経費が国の負担というのです。感銘を受けるとともに、掛け声だけは勇ましい日本の現状が頭をよぎりました。

大韓航空を利用したこともあり、帰路ソウルに立ち寄り、勤務大学修士修了生のジョン・ヒョン・ドンさんと会い、今後の国際交流を展望することにしました。2009年3月留学先のカリフォルニアで会って以来です。韓国の重量挙げチームに通訳として随行し、前日ロンドン五輪より帰国したばかりのジョンさんは、圧倒的に「グローバル化」していました。スマホにかかってくる電話に、英語や中国語で流暢に受け応え、私には丁寧な日本語で対応します。本人曰く、「以前は、外国語では日本語が一番得意でしたが、今は、中国語、英語、日本語、スペイン語の順です。」また現在、仲間とともに、社団法人「国際スポーツ指導者協会」(International Association for Sports Instructors)を立ち上げたばかりと知り、さらに圧倒されました。

翌日は、私の希望で、ソウルから高速道路を1時間以上南下した「独立記念館」(Independence



Hall)に連れて行ってもらいました。冒頭1時間ほど、館員で日本留学経験のある金ボランさんに流暢な日本語で案内してもらい、帰り際には、英語版の3枚組DVDまで頂いたことは有難く、忘れられない幸運でした。韓日関係の辛く悲しい歴史を「危機」(Crisis)と表現し、歴史に沿い、国内外の一次資料とともに詳細に展示した7つの建物を巡りながら、私は想像を超えた「韓国パワー」に圧倒され続けていました。



## 新支部会員紹介

### 青柳 達也 (福岡大学)

皆様、こんにちは。CAJ九州支部の新会員となりました青柳達也です。

私の専門分野は演劇です。まだまだ演劇はコミュニケーション学以上に学問として日本では定着しておりません。しかし、近年では演劇の手法によるコミュニケーション能力育成の取組みが大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授・文部科学省コミュニケーション教育推進会議委員(座長)の平田オリザ先生を筆頭に始まっています。



そもそもコミュニケーション能力は遊びや友達関係の中で自然に身に付くものと日本では考えられてきたのですが、地域や社会環境の変化に伴い、学校などでもコミュニケーション能力の育成に関与する必要性が出て来たと言えます。ご存知の通り、高等教育においては就職時のコミュニケーション能力の育成が確実に求められています。メディアなどでも、特に若者のコミュニケーション能力の低下が問題視されており、育成の必要性はこれからも増すと言えます。

私はアメリカで演劇を学び、大学で演劇(身体表現専門)を教えていました。2008年に帰国して以来、多年齢層を対象に公開講座や生涯学習、学校訪問ワークショップなどを行い、演劇の手法によるコミュニケーション能力育成に携わっています。佐賀大学では、デジタル表現技術者養成プログラムにて「身体表現」という科目で4日間の集中講義を2011年度より毎年実施しており、その他にもコミュニケーション能力育成講座を福岡大学や活水女子大学などで開催しました。このような実績をもとに、現在、福岡大学人文学部人文科学研究科教育・臨床心理専攻博士課程後期に在籍し「演劇の手法を使ったコミュニケーション能力育成の実践研究」をすすめています。

これから更なる研究を重ね、高等教育においても実践の幅が広がるように努力していきたいです。まだまだ駆け出しの研究者でありますので、会員の皆様からご指導いただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

### 柴崎 行雄 (九州大学)

30代半ばにして、社会人学生として4年目の冬を迎えています。会社では中堅社員として結果を求められ、大学院でも研究論文の成果を期待される。睡眠数時間、徹夜も当たり前の苦行のような日々です。では、なぜ今更学業に足を踏み入れたのか。その理由は、知りたいことがあり、それを知っている(研究を続けている)方々がいて、そんな集まり(CAJ九州支部等)に参加させてもらえるからです。

私が知りたいのは「将来を支える人材をどのように育むべきか」ということです。きっかけは海外 10 ヶ国以上での仕事の経験でした。現地で痛感した、若者たちの貪欲さと、いわゆる「エリート」意識。訪れたのがアフリカや南米など、経済発展の遅れている国だったからかもしれません。彼らの根底には、勉強をすることで可能性を高めたい野心と、勉強をさせてもらえる環境への感謝がありました。それに比べて日本国内の若者たちはという...。身近に接していて焦りを覚えました。与えられた環境を当然とみなし、漫然と過ごしている人間が多過ぎたのです。



危機感があれば良いわけではありませんが、現状への不満をエネルギー源として行動に移せるのは若者の特権です。まずは自らも(若者かどうかはさておき)、体系的に学ぼうと大学院の門を叩きました。会社に内緒だったため、英語・言語学・コミュニケーション学(初めて本格的に勉強)・論文面接を学生に混ざって受験。入学してからは、学生の基礎能力に関する「リメディアル教育」を研究して修士論文をまとめました。その後、旅先の韓国で、大学入試日(日本のセンター試験に相当)に遭遇。過熱する一方の教育熱の功罪を目の当たりにしました。文化と歴史の差異を理解したうえで、隣国を日本の合わせ鏡として教訓を学び取ることはできないか。それが現在の博士論文の課題になっています。

研究発表などでお会いする機会も多いかと思います。少し老けた学生ではありますが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

## 編集後記

CAJ九州支部がスタートして来年で 20 歳を迎えます。来年の長崎での 20 周年記念支部大会が今から楽しみです。

ところで、22 号のニューズレターがようやく完成しました。執筆者の方々のご協力に、この場をお借りして感謝申し上げます。ニューズレターが、支部会員だけでなく、たくさんの人たちとの交流(つながり)の場と、情報発信の場になればと願っています。

編集責任者 清水 孝子(日本文理大学)

伊佐雅子支部長と鎌田史支部会員

2012 年 10 月 6 日の支部大会の懇親会にて

